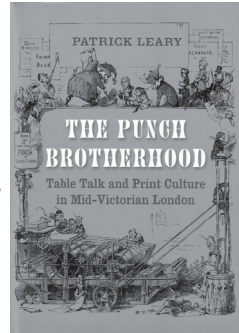


## 書評

Patrick Leary, *The Punch Brotherhood: Table Talk and Print Culture in Mid-Victorian London* (London: British Library, 2010)

大久保 譲



Patrick Leary の *The Punch Brotherhood: Table Talk and Print Culture in Mid-Victorian London* は、ヴィクトリア朝文化研究の基本資料である『パンチ』に対する見方を更新する好著だ。とりわけ、序文と第1章・第2章は興味深い。従来の歴史研究・文化研究において、あたかも「単一の著者による、統一的な」『パンチ』の姿勢があるかのように語られてきたことを、リアリーは疑問視する。「研究者が『パンチ』の諷刺画を利用する際、それらが製作された背景まで考慮に入れた、よりニュアンスに富んだ解釈に及ぶことは滅多にない。多くの歴史家や文学者にとって、『パンチ』の諷刺画は、たんに当該の問題や出来事に対する“ヴィクトリア時代の”態度を反映しているものなのだ」。だが、こうした態度は、「実際にその記事を書き、挿絵を描いた人々、そして『パンチ』テーブルの周囲に集まって編集方針をめぐる丁々発止の議論を繰り広げた人々について私たちが知りうることを曖昧にし、無視している」(p. 4) とリアリーは警告する。

ここで言う『パンチ』テーブルとは、現在もブリティッシュ・ライブラリーに保存されている、楕円形の木製の大きな食卓のこと。『パンチ』のスタッフは毎週水曜の夜にその周りに集い、飲み食いしながら編集会議を開いた。文字どおり「食卓談義(テーブル・トーク)」の場である。この「かつてはロンドンでもっとも有名だったテーブル」(p. 1) に注目することで、リアリーは二つの試みをしている。まず、『パンチ』の中に、相互に矛盾さえする複数の声を聴きとること。もう一つは、18世紀までの豊かな声の文化(oral culture)の伝統が、19世紀になって文字の文化(print culture)に取って代わられた、という通説に抗い、文字の文化の中にも息

づいていた声の文化のネットワークを描き出すこと。その点で本書は、圓月勝博編『食卓談義のイギリス文学』（2006）などに通じる、「テーブル・トークの文化史」としての側面も持っている。「本書における私の関心は、テキストとしての雑誌ではなく、企業としての、そして仕事の共同体としての雑誌なのだ」（p. 6）。

出版社の一室に据えられた『パンチ』テーブルでの、飲食を伴う談論風発を再現するために、リアリーはブリティッシュ・ライブラリーに残されたヘンリー・シルヴァーの日記を参照している。1858年から1870年までの12年にわたり、スタッフとして欠かさず会議に参加したシルヴァーは、席上でのさまざまな発言や意見の対立、さらにはゴシップに到るまでを、克明に日記に残していた。リアリーはこの日記を丹念に読み解き、一冊の『パンチ』が、それどころか一枚の諷刺画が完成するまでのあいだに、多様な「声」が交わされていたことを明らかにしていく。

第1章、‘The Brotherhood of the *Punch* Table’では、「テーブル・トーク」としての編集会議の成立と変化を辿っている。しばしば保守的で排外的なミドルクラスの価値観を体現するとされてきた『パンチ』だが、1841年の創刊時には、むしろ18世紀の猥雑なクラブ・ストリート文化にその根を持っていたのだとリアリーは指摘する。なにしろ、当初の『パンチ』編集会議は、クラブ・ストリートの酒場で行われたのだ。『パンチ』創刊が、高山宏が「円卓のセミオティケー」（『アリス狩り』[1981]所収）で円卓をめぐる「饒舌な祝祭」と呼び、見事に分析してみせたトマス・ラヴ・ピーコックの「テーブル・トーク小説」と同時代の出来事だと気づくだろう。初期の編集スタッフもまた多彩だった。ヘンリー・メイヒューやダグラス・ジェロルドなど、労働者に同情的で多分にボヘミアン気質を持つ面々も主要な執筆者となり、会議では積極的に発言している。Sally Ledgeの *Dickens and the Popular Radical Imagination* (2007) で描かれる19世紀前半出版界のラディカリズムのいくばくかを、『パンチ』も間違いなく共有していたのである。

だが、出版社の一室に食卓談義の場が移されてから、騒々しくも活気に満ちた初期『パンチ』の雰囲気は失われていったとリアリーは述べる。メイヒュー、ジェロルド、それにリチャード・ドイルなど、ポリフォニック

な声を担っていた異色の人材が、一人また一人とテーブルを離れていった。マーク・レモンとその右腕のシャーリー・ブルックスによって、「テーブル」はしだいに洗練され、秩序だった会議の場となる。とはいえ、シルヴァーの日記を読めば、1860年代になってもなお、『パンチ』編集会議の席上では、下品な性的冗談さえ闊達に交わされていたことが分かる。会議の結果として刊行される雑誌の、穏当なミドルクラスの諷刺には収まらない雰囲気、テーブル・トークには横溢していたのだ。

シルヴァーの日記はまた、『パンチ』の最大の売り物だった、一ページを丸々使った大判諷刺画 (Large Cut) が生み出される経緯を教えてくれる。第2章 ‘Cartoons and Conversations: The Large Cut’ は、『パンチ』の諷刺画が、ジョン・リーチやジョン・テニエルといった諷刺画家ひとりの作品ではなく、テーブルでの会議によって作り出されていたことを明らかにした、とりわけスリリングな章だ。大判諷刺画として何を取りあげるか、どういった立場をとるか、どういった皮肉をこめるのか、読者の理解度はどの程度か。こうした点を、細部に至るまでスタッフが議論したうえで諷刺画家に描かせ、チェックしていた。シルヴァーの日記は、会議における意志決定のプロセスをつぶさに記録している。そこから浮かび上がるのは、一つの事象に対して、政治的立場や階級的出自の異なるスタッフからさまざまな意見が出され、“落としどころ” が探られていく過程だ。『パンチ』の諷刺画を「読む」さいには、十分な注意が必要だとリアリーは警告する。「諷刺画の解釈においては、複数のコンテキストに留意しなければならない」(p. 45)。会議での会話の流れ、雑誌の他のページの記事との関連、編集スタッフが議論し、結論を出す際に用いた情報や意見の典故、以前に掲載した諷刺画との関連、シェイクスピアやディケンズなど、パロディの原典。これらのコンテキストが複雑に絡み合っ、一枚の諷刺画が成立しているのだ。「会議と諷刺画の関係や、重なり合うコンテキストに慎重に目を向けると、『パンチ』の政治諷刺画はヴィクトリア時代の公衆の意見をそのまま“反映”しているという安易な従来の見解の誤りをはっきりするし、諷刺画は画家個人の作品だという考えもまた受け入れがたい」(p. 55)。

さて、示唆に富む前半部分に比べると、第3章以降は『パンチ』編集会

議をめぐる挿話の羅列というおもむきだ。最終章が‘Conclusion’ではなく‘Epilogue’となっている点も、本書のエピソード的な性質を示しているだろう。

第3章‘Gossip and the Literary Life’では、スウィンバーンやジョージ・オーガスタス・サラといった文人たちの噂が、テーブル・トークにおいて形成され、流通していくプロセスが示される。続く第4章‘Town Talk: Dickens, Thackeray, and the Policing of Gossip’においては、『パンチ』を揺るがしたゴシップ——1858年のディケンズの結婚生活の破局とエレン・ターナンとの関係——をめぐる、ディケンズと『パンチ』編集部との駆け引きが紹介される。この醜聞への対応の失敗によって、『パンチ』及びサッカレーを含むスタッフは、ディケンズとの友好関係を失うことになった。リアリーはこのエピソードから、当時のロンドン文壇におけるゴシップの政治学を読み取っている。

以上2つの章は、それこそゴシップ的に面白く書かれてはいるものの、批評概念としての「ゴシップ」が持つ可能性を十分に展開しきれていない。「ゴシップ」が興味深いのは、これがヴィクトリア時代にきっちり区分けされていた（とされる）「プライベート」と「パブリック」の境界を穿つものだからだ。William A. Cohen が *Sex Scandal: The Private Parts of Victorian Fiction* (1996) で提示した「スキャンダル」という概念とつなげて考えることも可能だろう。刺激的なクイア批評でもあるコーエンの著書と比べた場合、リアリーは、スウィンバーンの同性愛疑惑が『パンチ』テーブルの話柄に上ったことを指摘しながら、『パンチ』というホモソーシャルな集団のホモフォビアのありようについて分析していないという憾みが残る。

第5章‘Shirley Brooks and the flight from Bohemia’は、マーク・レモンの参謀として辣腕をふるい、レモン没後に『パンチ』編集長の座を襲ったシャーリー・ブルックスが、『パンチ』をジェントリファイしていくさまを描く。保守党寄りのジャーナリスト・作家として当時はよく知られていたブルックスが、持ち前の雄弁で食卓談義で頭角を現すにつれ、『パンチ』の多様性が影をひそめていった経緯が明らかにされる。そして第6章‘Bradbury and Evans and the Personal Politics of Print Culture’では、『パン

チ』の発行権を買い取って成功に導いた印刷業者ブラッドベリー & エヴァンズの活動を分析し、同社の出版業者としての限界を論じている。

興味深い指摘こそ含まれているが——そして読み物としてはそれなりに読ませるのだが——冒頭の2章のような一貫した明快な主張が欠けているぶん、後半の諸章は物足りなく映る。とはいえ本書が、『パンチ』の持つ複雑なコンテキストを浮かび上がらせた、ヴィクトリア時代文化の理解に資する貴重な試みであることは間違いない。